

これまでの流れ

- ・プランクによる黒体輻射、プランク定数
- ・アインシュタインによる光量子仮説

$$E = hf, \quad E = \frac{h}{T}$$

- ・ドブロイによる電子波の導入

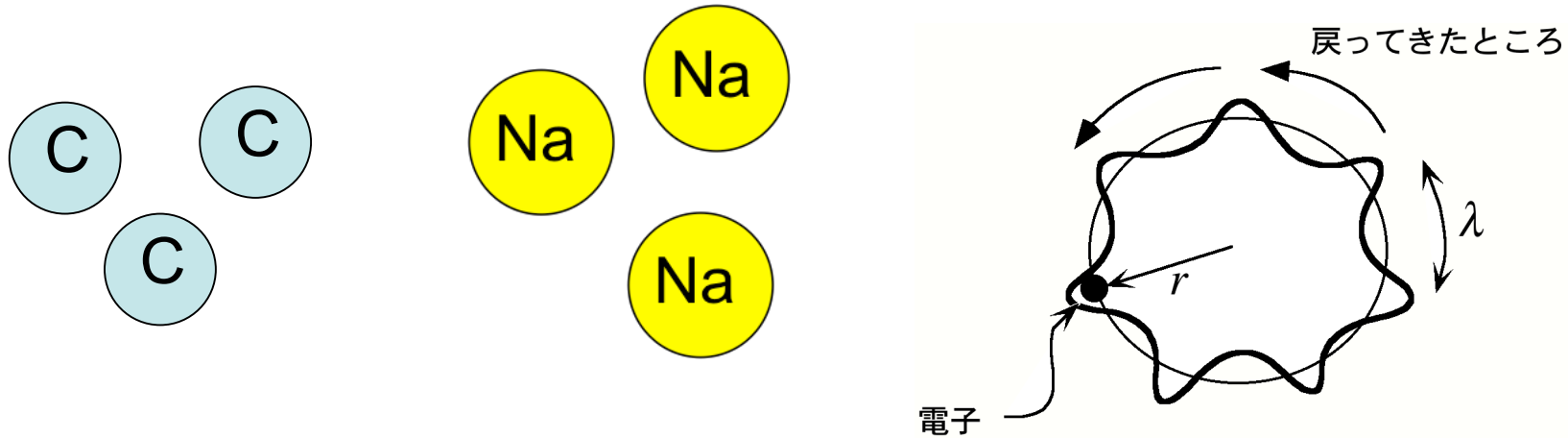
$$\lambda = \frac{h}{p}, \quad p = \frac{h}{\lambda}$$

Niels H.D. Bohr 1885-1962



原子模型

原子の大きさが決まっている



スケーリング(ケプラーの法則)

$$m \frac{d^2 r}{dt^2} = -\frac{e^2}{4\pi\epsilon_0} \frac{1}{r^2}$$

$r(r) = R(t)$ が解なら

$$r(t) = aR(a^{-2/3}t), \quad (a > 0)$$

も解になる

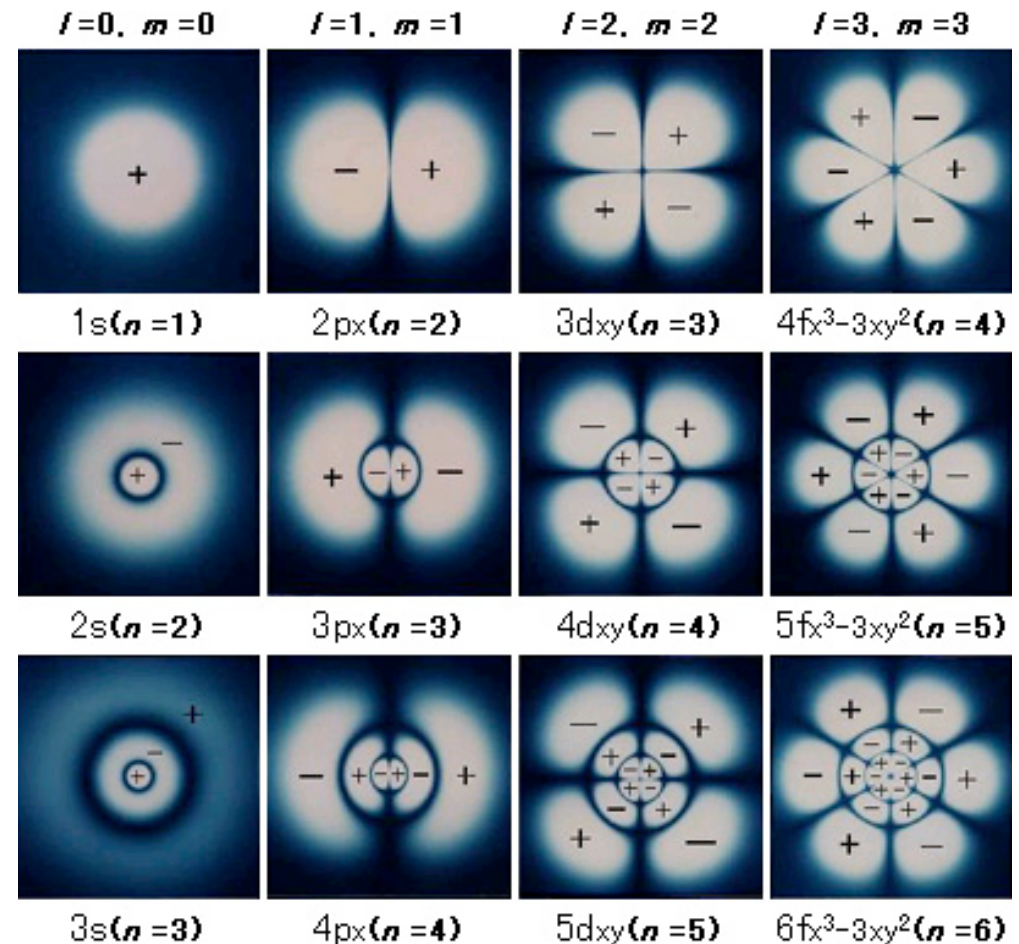
Erwin Rudolf Josef Alexander Schrodinger 1887-1961



シュレーディンガーの
波動方程式

$$i \frac{\partial}{\partial t} \psi = H \psi,$$

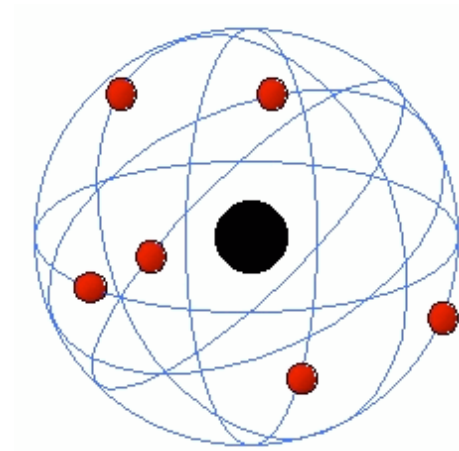
$$H = -\frac{\nabla^2}{2m} + V(x)$$



原子

原子核を覆う電子雲
=> 定常波を作る

古典的な線で書けるような
軌道は存在しない

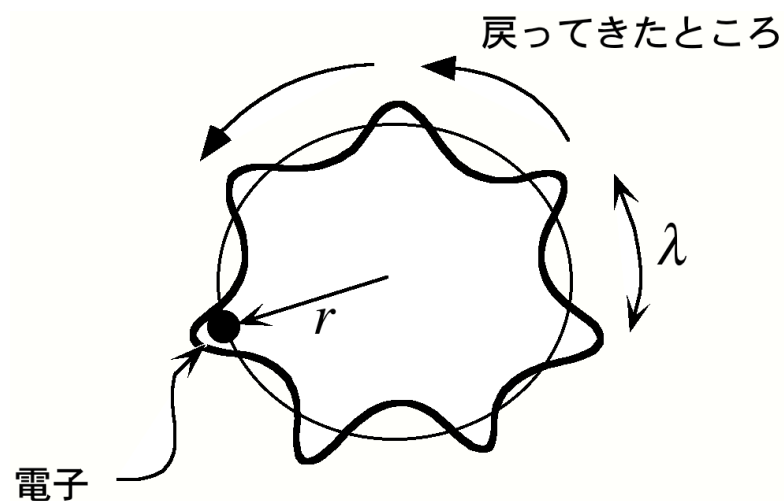


波長 λ の電子波が定常波を作る条件

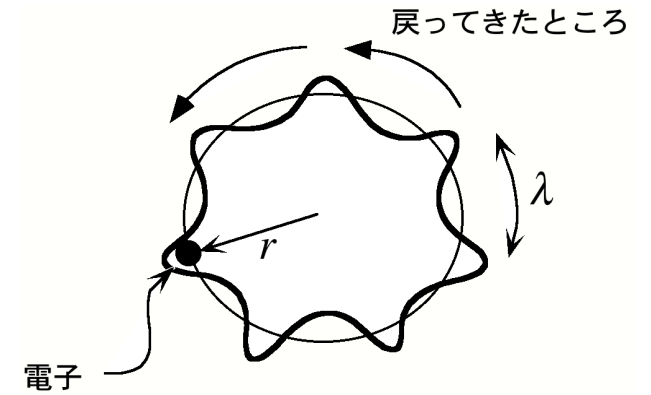
半径 r の軌道上で

ボーアの量子化条件

$$2\pi r = n\lambda \quad n \text{ は定常波の次数}$$



水素原子



ドブロイの電子波

$$\lambda = \frac{h}{p}$$

ボーアの量子化条件

$$2\pi r = n\lambda$$

λ, p, v を消去

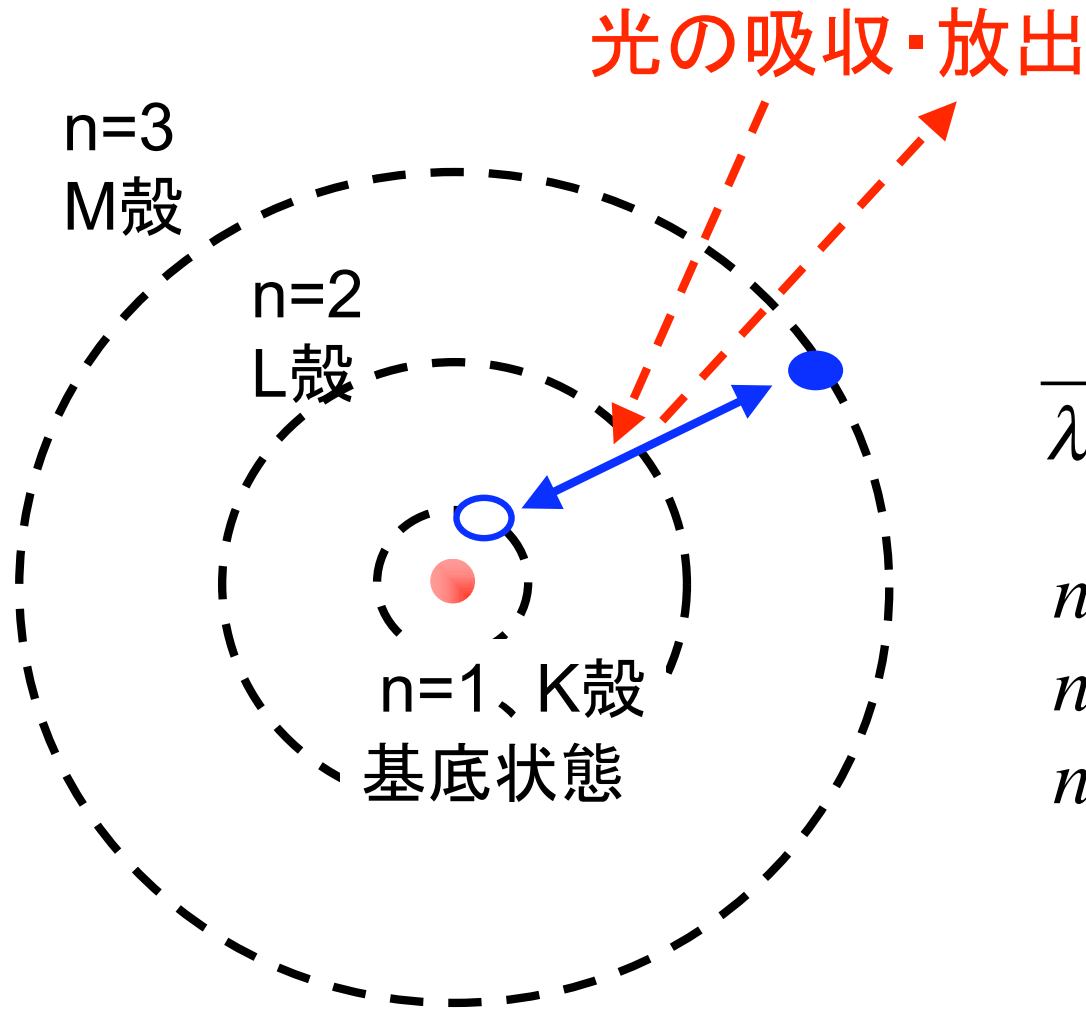
運動方程式

$$m \frac{v^2}{r} = k \frac{e^2}{r^2}$$

$$r_n = \frac{n^2 \hbar^2}{m k e^2}, \quad E_n = -k \frac{e^2}{2r_n} = -\frac{m k^2 e^4}{n^2 \hbar^2}$$

$$E_1 = -13.6 \text{ eV}$$

原子からの光



$$\frac{1}{\lambda_{nn'}} = R \left(\frac{1}{n^2} - \frac{1}{n'^2} \right)$$

$n=1$: ラインマン

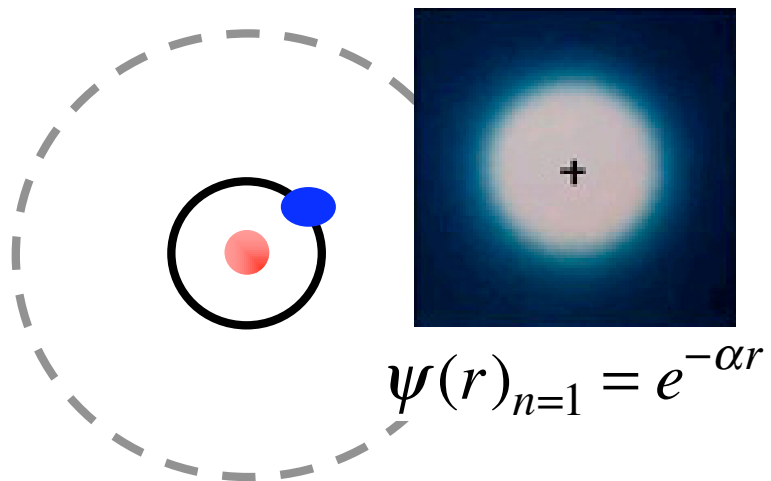
$n=2$: バルマー

$n=3$: パッシェン

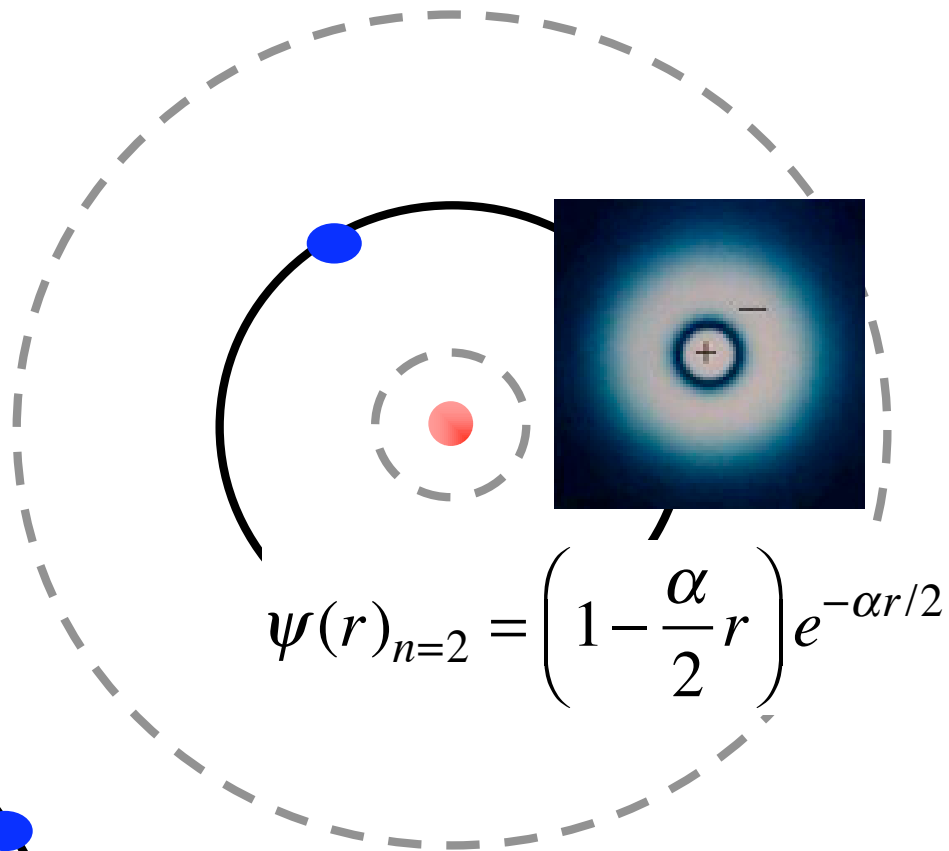
系列

R : リュードベリ定数

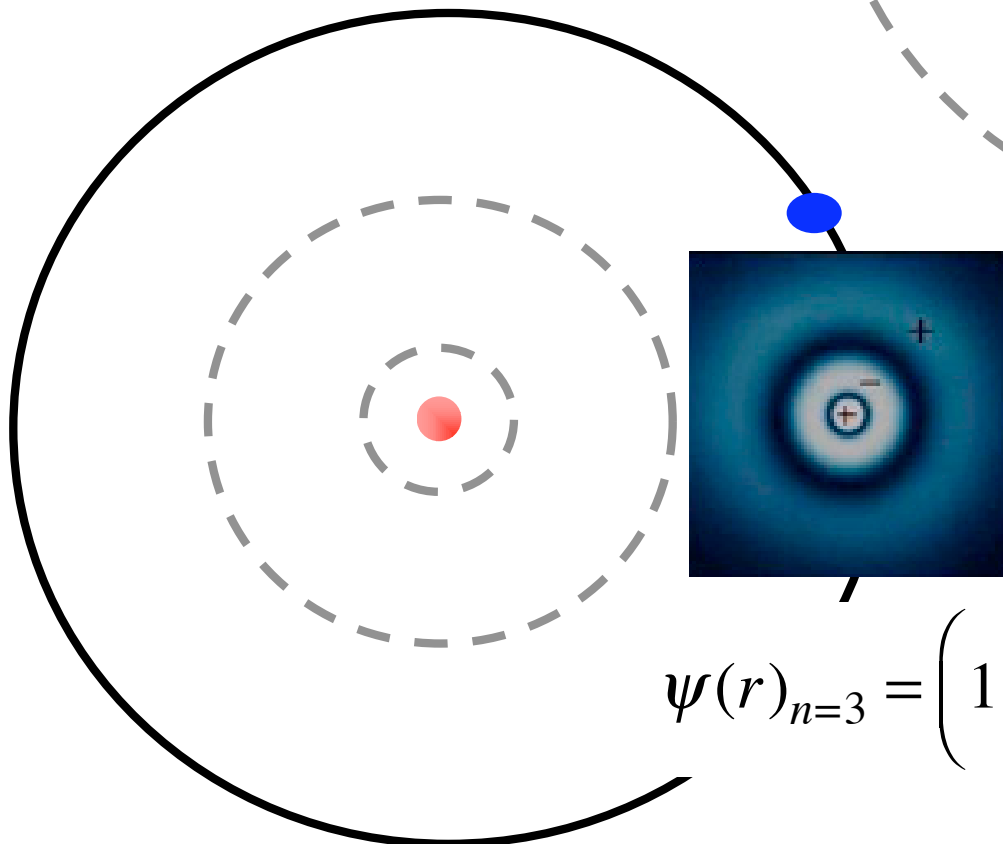
C.G. Barkla (1877- 1944)



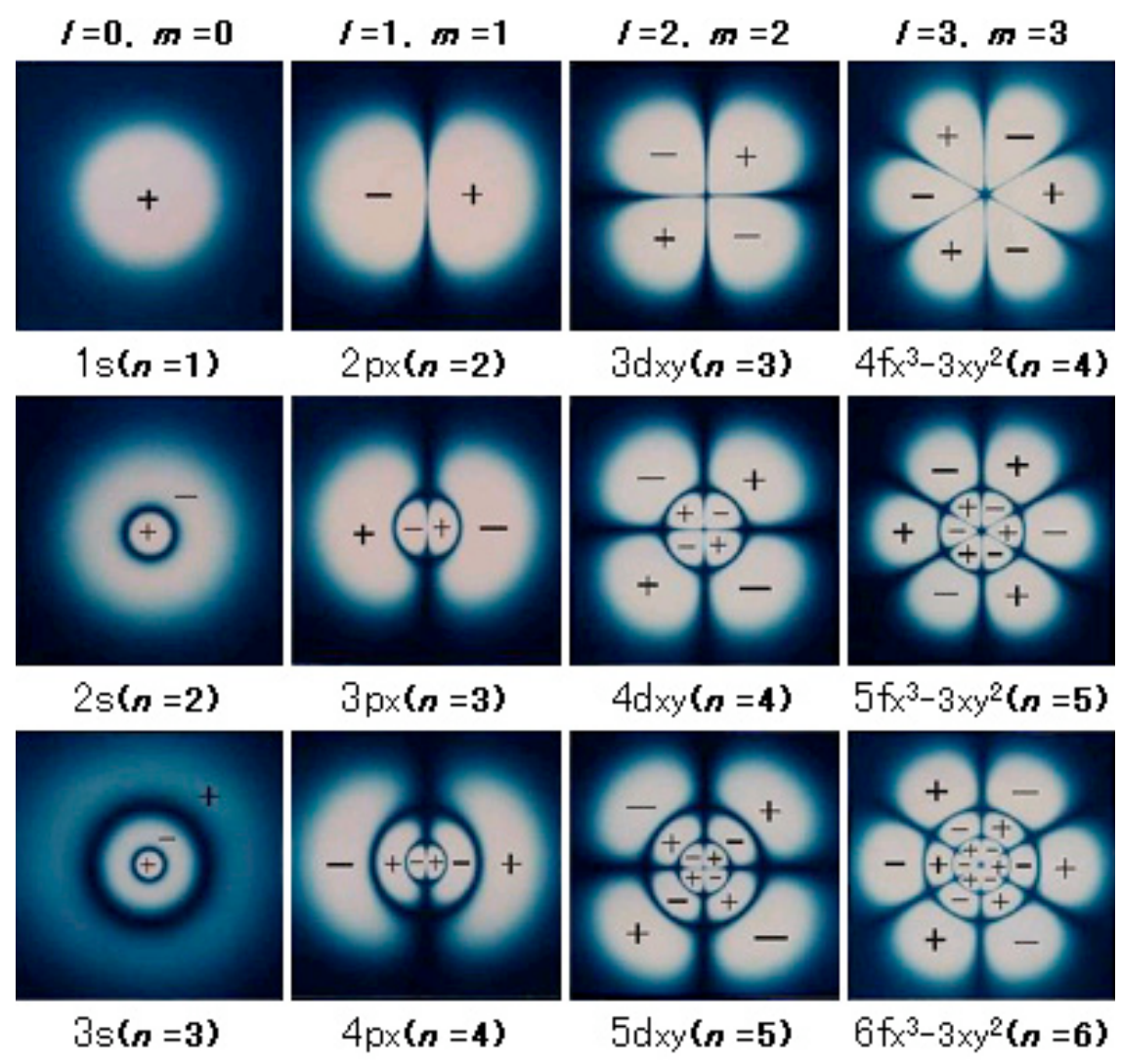
$$\psi(r)_{n=1} = e^{-\alpha r}$$



$$\psi(r)_{n=2} = \left(1 - \frac{\alpha}{2} r\right) e^{-\alpha r/2}$$

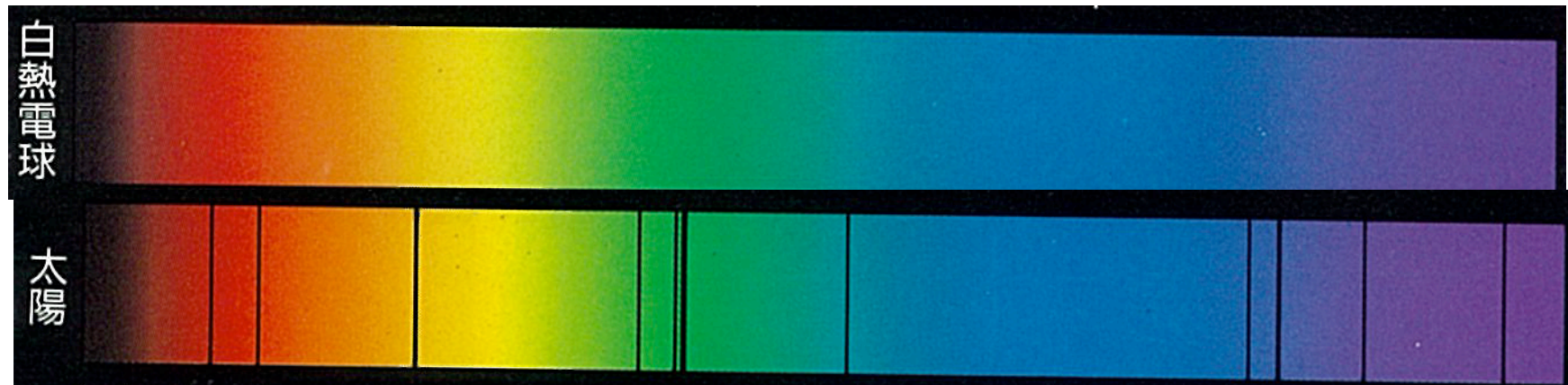


$$\psi(r)_{n=3} = \left(1 - \frac{2\alpha}{3} r + \frac{2\alpha}{27} r^2\right) e^{-\alpha r/3}$$



非等方な形は角運動量に関係

太陽光のスペクトル



抜けているところは太陽を構成する原子の構造に関係